

「思想運動としての『銀河鉄道の夜』」

伊勢 弘志

世界に対する大いなる希願をまづ起せ・・・。

宮沢賢治「農民芸術概論¹」より

はじめに

本稿は、大正時代に構想・創作された宮沢賢治による文学作品・『銀河鉄道の夜』の分析を通じて、同時代にみる社会的背景と思想潮流についての考察を試みるものである。

『銀河鉄道の夜』は、『校本宮澤賢治全集』²で明らかになったように「第一次稿」から「第四次稿」まであり、そのうちの第三次稿を「初期型」、児童文学へ書き換えられた第四次稿を「後期型」としてそれぞれを最終形態としている。その成立過程は天沢・入沢両氏の研究による綿密な資料調査の結果に、それぞれの原稿の改稿過程や内容の加筆修正部分に至るまで解明されている³。以後は同研究に基づき、現在までに第一次稿の着手は1923（大正12）年頃からで、翌年か翌々年には一応の形になっていたことが確認されているが⁴、作品はその後も手が加えられ続けて1933（昭和8）年に賢治が亡くなる際の枕もとに未完成稿として残されたものだった。未完でありながらも同作品はそれまでの宮沢文学による「いろいろな詩のイメージ、童話作品の集大成として評価され」⁵、大正期の全般を通じて創作されていたそれまでの作品のテーマが凝縮されていると言われる。

本稿では賢治の「人生観」や「死後の世界観」についても考察するため、作品中に登場する場面や登場人物たちの言動をとりあげるが、その際は、谷川徹三氏が賢治の実弟である清六氏との交流によって遺稿をまとめた岩波文庫版『銀河鉄道の夜』を一貫して使用する。

論考の過程では作品中に現れる「二つの天上」に、賢治の有した法華信仰による実践主義の影響を見ることになるが、本稿の観点からは、日蓮系の教義が隆盛するにはその背景に不安定な社会状況が必要であり、『銀河鉄道の夜』の創作環境もその条件の下にあった。結論としては、社会に対する憤懣と変革要求をもって革命思想に関心を抱いた賢治が、行動原理を求めた結果に日蓮信仰を得たことを述べるが、その過程では信仰とマルキシズムへの関心との間で揺れ動く姿を明らかにすることになる。『銀河鉄道の夜』には賢治の葛藤が秘められており、またそれは大正時代の革命思想の潮流も映し出していることを評価する。

【キーワード】

二つの天上・実践主義・思想潮流・変革要求

1、『銀河鉄道の夜』の生い立ち

『銀河鉄道の夜』は作品全般を通じてキリスト教的イメージによる描写で彩られている。作品の進行や構成の問題をとっても、「鉄道」が北の十字架である白鳥座から南の十字架である南十字星を旅するもので、あたかもそれは教会から教会へ巡礼するキリスト教的な「天国への旅」のようでもある。また、頻繁に登場する讃美歌こそは、賢治にキリスト者としての思想があったことを想像させがちであろう。そのためか宮沢賢治には1914(大正3)年に組織された新興宗教団体「国柱会」による日蓮主義信仰があった事実は一般にあまり知られていない。

日蓮主義への賢治の信仰は1915年以後のもので⁶、実は賢治の作品全般にわたって信仰の影響が確認される。そもそも賢治は家出同然の状態でご郷から上京しているが、出郷は両親の日蓮主義への改宗を説得するも聞き入れてもらえず、仲違いの関係になってしまった事が原因であった⁷。東京で「国柱会」を訪ねた賢治は、生活基盤を得るためにも国柱会での仕事を得たい希望であったが、幹部の高知尾智耀に「まずどこかへ落ち着かれてから、ゆっくり信仰について伺いましょう」と促され、仕方なく間借りした家から出版社の仕事についたそうである⁸。

その時の賢治は、

「〔上京して〕三日目の朝大學前で小さな出版社に入りました。謄写版で大學ノートを出すのです。朝八時から五時半迄坐り切りの労働です。周囲は着物までのんでしまつてどてら一つの主人の食客になつている人や沢山の苦学生、辯にならうとする男やら大抵は立派な過激派ばかり主人一人が利害打算の帝国主義者です。後者の如きは主義の点では過激派よりももつと悪い。国柱会の国家がもし一点でもこんなのならもう七里けば御免を蒙ってしまう所です。さあここで種を蒔きますぞ・・・」⁹

と意思を述べた。

上述の通り賢治の出郷は両親の改宗を願つてのことであつた。賢治は改宗説得に失敗してショックを受けながらも、法華經に帰依した以上は己一人にのみ与えられる救いであつてはならないと決意し、一家の改宗を第一に果たし、その後には社会に自身の信仰する教義を及ぼしていこうとする遠大な目標を建てた。東京生活はその活動の第一歩と位置付けられ、賢治はここから「種を蒔く」と言つたのである。こうして賢治は、水とジャガイモばかりを口にしながら、昼は出版業に携わり夜は国柱会のボランティア活動を行なう生活を迎えた。そうする内にやがて前出の高知尾から勧められ、日蓮主義を広めるための童話を作成することになるのである。

賢治の東京生活は期間にしてわずか6カ月程度の間であつた。後に東洋のアンデルセンと評価される賢治の作品の多くはこの間に執筆される。

「人間の力には限界があり、仕事をするのには時間が要りますね。私はどうせ間もなく死ぬのだから、早く書きたいものを書いてしまおうと思ひ、一カ月の間に三千枚書きました。」¹⁰

超人的な精力を以って書かれたこれらの作品は、当初誰にも認められることなく、そのままトランクの中にしまわれることになった。東京生活が半年たった時、賢治の妹・トシの病気の報を受け、この作品のいっばい詰まったトランクを持って帰郷することになる。

以上に述べたように、賢治にとって文学作品を書くことは日蓮主義の布教に他ならなかった。そして、国柱会の存在なしにはイーハトーブ文学も成立し得なかったのである。まずは、賢治に日蓮主義の信仰があったことと、文学作品を書く切っ掛けが信仰活動と密接であったことを確認したところで、次に宮沢文学の代表作『銀河鉄道の夜』に顕れている日蓮主義の影響を具体的に検討してみたい。

2、贖罪意識と「二つの天上」にみる死後の世界観

多くの文学者の手によって分析されてきた『銀河鉄道の夜』は、それまでの研究蓄積を網羅して検討をされた村瀬氏に代表されるように、現在までに「主人公・ジョバンニの成長過程の物語」として評価されることが定着しているようである¹¹。

「鉄道」の旅は登場人物・カムパネルラの懺悔から始まる。物語の最後には、友人を救うために自ら犠牲になった死者・カムパネルラの死因が明かされるわけだが、彼は母親が自身の死、あるいはその死に方を許すかどうか悩みながら旅立つ。ここには生と死に関しての善悪の問いが見られるが、同様の問いや葛藤は「大学士」の件や「さそり座」の件にも見受けられる。

鉄道旅行の中盤から登場する大学士一行は、家庭教師を務める「大学士」と教え子である「女の子・かほる子」、そしてその弟である「六つばかりの男の子・タダシ」の三名で、登場した直後に大学士が、

「ああ、ここはランカシャイだ。いやコンネクチカット州だ。いや、ああ、ぼくたちはそらへ来たのだ。わたしたちは天へ行くのです。ごらんなさい、あのしるしは天上のしるしです。〔中略〕わたくしたちは神さまに召されているのです。」¹²

と語ることから、登場時のカムパネルラよりも死後の認識を一層明確に表す登場人物となっている。

この大学士一行は、1912(明治45)年4月15日の英豪華客船「タイタニック号」沈没事件による遭難者であることが判る。それはタダシの「船に乗らなきゃよかったなあ」や、「冰山にぶつかって船が沈みましてね」という大学士の台詞からも読み取れるし、左舷半分のボートがだめになっていたという説明からも明らかであろう。「ランカシャイ」と「コンネクチカット州」もタイタニック号の出港地・サウザンプトンがあるイギリスと、彼らが到着できるはずだった「新大陸」の地名である。遭難時の大学士は、連れている姉弟を他の犠牲者たちを押しつけてまで助けようか悩んだ末に、一緒に死ぬことの方が幸せにつながると考えて死を選択した。

また、かおる子によって語られる蠅の物語では、それまで殺生を重ねることで生き長らえて来

たサソリが今度は自分が鼯に追われて死に直面すると、鼯から必死に逃げて井戸に落ちる。井戸の中で自らの行いを悔いたサソリは、

「どうしてわたしはわたしのからだを、だまっていたちにくれてやらなかったろう。そしたらいたちも一日生きのびたろうに。どうか神さま。私の心をごらんください。こんなにむなしく命をすてず、どうかこの次には、まことのみんなの幸いのために私のからだをおつかいください。」

13

と語って、夜の闇を照らす「さそりの火」となった。即ち彼らは、自身の命と引き換えに他者への貢献を懇願して死した登場人物たちだったわけである。上述の三者の物語が本編の粗筋そのものといっても過言ではないが、三者に共通して言えることは、その中に「生の葛藤」と「自己犠牲」の信念が見られる点であろう。

賢治には、信仰の影響であるのか「生きることは罪深い」という考えが強く、作品中の重要な登場人物たちは皆が謙虚で自責の念を強くもっている。善悪を問い詰めるために、自身の人生を肯定しがたい登場人物らは「自分の行いは正しかったのかどうか」悩みながら死後の世界へ旅立つのである。その悩みは、死者自身の行き先が「天上」であることが確認されていても変わることではない。そして罪深い生に報いることができるのは、自己犠牲による死ということになるのだろう。ただし、賢治が作品中でカムパネルラに彼の悩み(最初の懺悔)を解決させていないところを見れば、果たして自己犠牲が罪深い生に対する充分な贖罪に値するのかどうかという問題は、賢治にも解答できていなかったことになるだろう。従って、本編を創作する段階においては、自己犠牲が賢治にとっての最善の仏性への貢献であったと言えるのではないだろうか。

またその問題と並行して、『銀河鉄道の夜』では死後の世界が特定されないという点を指摘できる。それは「天国」や「極楽」といった人生の終着点の一つに絞られておらず、少なくとも本編では二つの「天上」が登場することが発見できるためである。

そもその鉄道自体の性格は不明だが、大学士一行とカムパネルラは死後の世界へ行く為に乗っている。さらに彼らは、皆等しく「溺死者」であるという共通点を有している。そのため、カムパネルラの登場場面では、「ぬれたようにまっ黒な上着を着たせいの高い子供が、窓から頭を出して外を見ている」となっており、大学士一行が鉄道に乗りこんで来た場面では、「青年はなんとも言えず悲しそうな顔をして、じっとその子の、ちぢれてぬれた頭を見ました。」と、溺死者たちは一様に乗車時の身体が濡れている。同じ席に着き、タイタニック号が行けるはずであった新大陸¹⁴のトウモロコシ畑を共に旅する溺死者たちは、同じ鉄道によって死後の世界へ迎え入れられるはずである。他者を救うことを願いながらも遇えなく死んだ死の経過や死因についてカムパネルラと大学士には強い共通性が挙げられる。ところが、それにも関わらず両者の行く先は異なるのである。

大学士一行が他の乗客達と共に「南十字」で下車し「神の御許」に行くのに対し、カムパネルラ

のみはその先の「石炭袋」まで行かねばならない。鉄道から石炭袋が見えると、カムパネルラは「あそこがほんとうの天上なんだ、あっ、あそこにいるのはぼくのおっかさんだよ」と述べる。その石炭袋(暗黒星雲)には彼の母がすでにいるらしく、また彼にはそこが「ほんとうの天上」だと言うことである。

カムパネルラは真の天上の所在を告げてジョバンニから去っていくが、この「二つの天上」は、賢治の宗教観に根ざしているのではないだろうか。つまり、前者は基督教の天上で、後者は賢治の宗教観による「第二の天上」(天上世界の階層性)ではないかということである。カムパネルラはジョバンニと共に他の乗客を第一の天上に見送った後、「あそこが本当の天上なんだ」と言い残し「石炭袋」に向かう。生に葛藤する賢治にとっては基督教の天上は「真の天上」足りえず、本当の幸福を追求する旅は基督教的死生観には終わっていない。しかしその後登場する、さらなる天上の世界があたかも暗黒のような描かれ方をしているように、賢治にとっての「真の天上」は未だ解答できない、描くことのできない世界であったようである。

従来『銀河鉄道の夜』論でもタイタニック号が登場すること自体は指摘があり、なかには当時の科学技術の結晶である不沈船・タイタニック号は、科学万能を信じる人間の奢りの象徴で、作品中でも沈みゆく時に遭難者たちに讃美歌を歌わせているのは、賢治が科学万能主義に警鐘を与えて宗教性を再評価しているためであるとする見解もあるが¹⁵、本稿が述べる「二つの天上」については管見の限りにおいて、掘り下げられたことがない。唯一、分銅氏が賢治の法華信仰の影響を測りつつ「基督教的天国を終着点とするもので」ないことを分析しているが¹⁶、ここではジョバンニとカムパネルラの行先の相違点を上げるに留められており、「二つの天上」が何によって分たれ、どのような意味をもつのかといった問題については議論されなかった。しかし、作品全般に現れた基督教色とは裏腹に、強烈な法華信仰を得ていた賢治の思想背景を考える上では「二つの天上」の意味が掘り下げられるべきではないだろうか。

3、ジョバンニの切符に見る「現実世界の優越性」

『銀河鉄道の夜』からは、他の賢治の作品同様に宗教観と科学の融合や、大正期の時代背景が発見できる。例えば、鉄道の動力を問う件やタイタニック号に関するニュースを取り入れていることから時代背景を知ることができるし、現世と死後の世界を「三次空間」・「幻想第四次」などと表現していることや銀河空間(死後の世界)の描写に頻繁に使用されている図形や記号からは、第一次世界大戦期の前後で日本に流入された科学や幾何学の素養を見ることができる。そして、これまで述べてきたように『銀河鉄道の夜』では賢治自身の悩みと思われる葛藤が見られるのである。

賢治が信仰の対象として選択した国柱会において、その宗旨が特異的なのは、他の教団と違い現実生活での教義の実践にあった。妹の看病と死の問題に直面する賢治にとって死後の世界

は「幻想」であったのではなく、誰もが取り組まねばならない切実な問題であったことが関係していそうであるが、以下ではその「日蓮主義」がどのような宗教であったのか検討する。

田中智学の創設した国柱会は、新興日蓮主義運動の活動拠点として盛んな講習会の開催や、刊行物の出版などを行なった宗教団体であった。「日蓮主義」という名称は、智学が思想運動を起こすにあたって新たに生み出した造語で、「汎く信仰も理解も含まれて居て、宗教・宗旨・教法などということよりも、今少し広汎な意味に用いられる」¹⁷事をいうのだが、ここには、智学が内的信仰に留めずに思想的・生活様式的にも普及を試みた事を覗える。つまり信仰の基本姿勢として、従来の日蓮宗の檀徒としての単なる信心ではなく、実践的に自ら信仰を体現してゆかねばならないと主張することに特徴をもつ新興宗教だったわけである。そしてこの、日蓮主義の「此岸救済を目的とする現世での実践」が、他宗の「彼岸成就」を目的とする信仰スタイルよりも尊いという考えが、『銀河鉄道の夜』の中にも著されている。

主人公の二人が、鉄道を使用して鶴や雁を捕ることを生業としている「鳥を捕る人」と一緒に車掌の検札を受ける場面では、ジョバンニが知らないうちに上着に入っていた切符を車掌に渡すが、その切符は他の乗客たちの切符とは異なる、「三次空間の方」から持って来たらしい特別な切符であった。いかにも鉄道の常連という雰囲気登場する「鳥を捕る人」は、ジョバンニの切符を見て以下のように「あわててほめる」。

「こいつはもう、ほんたうの天上さえ行ける切符だ。天上どこぢゃない、どこでも勝ってに歩ける通行券です。こいつをお持ちになれあ、なるほど、こんな不完全な幻想第四次の銀河鉄道なんか、どこなでも行ける筈でさあ。あなたがたたいしたもんですね。」¹⁸

真相としては、ジョバンニだけは現世の生者のまま鉄道に乗っているのだから、カムパネルラら死者とは違った切符を持っていることになるのだが、「鳥を捕る人」によればその切符は天上に行く為どころではないもっと価値ある切符で、それを持つジョバンニは立派な「たいした」ものなのである。

右の「切符」をめぐる見解には、「四次元世界を自由に歩ける通行券を持ちつつ三次元世界を生きること」で銀河系を自らの中に意識してこれに応じて行くことである¹⁹とする見解があるが、賢治に日蓮主義の影響があることを考慮すれば、「三次空間」に対して死者の世界が「こんな不完全な」ものとして描かれていることも含め、むしろ現世の優越に対する賢治なりの表現と捉えるべきでなないだろうか。その上で再び「切符」を考察すると、真の天上に行くことができるのはジョバンニだけであるように読めるのであり、その場合にはほんとうの天上に行けるのは生者のみで死者には行けないという解釈が成り立つのである。従って、賢治が法華信仰の中でもとりわけ「日蓮主義」を選びとった理由は、ジョバンニの切符が有した「三次空間」の優越性にこそ見つけることができる。

さらに、現世の優越性はジョバンニと大学士らとの間で討論される「ほんとうの神さま」の議論からも読み取れる。大学士一行が「天上」であるサウザンクロス（南十字）で下車しようとする、ジョバンニは「天上へなんか行かなくなっちゃっていいじゃないか。ぼくたちここで天上よりももっといいところをこさえなきゃいけない」と述べる。天上ではなく現在自分たちの立脚する世界で、「天上よりももっといいところ」を創造しなくてはいけないと述べるのだ。このあと、それでも神の待つ天上へ行くと言うかほる子に対してジョバンニは「そんな神さまうその神さまだい」とサウザンクロス自体を否定する発言をする。そして大学士が、

「あなたの神さまってどんな神さまですか。」と笑いながら問うと、

「ぼくほんとはよく知りません。けれどもそんなんでなしに、ほんとうのたった一人の神さまです。」

「ほんとうの神さまはもちろんたった一人です。」

「ああ、そんなんでなしに、たったひとりのほんとうの神さまです。」

と議論が交わされる²⁰。

ジョバンニの「神さま」は、死者を受け入れてくれる神ではなく現世での理想社会の実現を望む神であり、彼の「たったひとりのほんとうの神」と言う表現からは世界の各宗教や死後の世界観を超越する存在としての神と解釈できるであろう。この「各宗教を超越する」神の発想については次節に扱うが、賢治の宗教観を読み取れば、日蓮教義に通ずる理想社会の実現のために実践されるべき活動が「正しい生き方」であるという考えの顕れと解るのである。そもそも、賢治に法華文学としての童話創作を勧めた高知尾ら国柱会にとって、純正日蓮主義の信仰とはそれぞれ生業を通じて開顕するもので、文筆に従うものは筆をとって本領を発揮するものであった。そのため、本作にも賢治の描く「あるべき信仰」のあり方が滲み出ている。信仰を内心に留めず実践すべきとする日蓮の教えを一層強化した日蓮主義によって、法華経に示される理想世界を実現させようとする強い態度が、天上や死後の世界よりも現実社会を重視するジョバンニの姿に認められるのである。

4、予言と世界統一の教義

以上に日蓮主義の性格と、『銀河鉄道の夜』に見る影響について筆者の考察を述べたが、ここでさらに、賢治が家出をしてまで選びとった日蓮主義の特徴と、同時代における日蓮主義の有した社会的意義について述べたい。

日蓮主義の特徴は、鎌倉仏教の他の宗祖たちと比較した上で、日蓮が国家との関係性を強調したと説明する点が挙げられよう。智学は、「日本書紀」から「葦原千百秋瑞徳国者は吾思想可王之也宜爾皇孫就而治焉行矣宝祚之隆当与天壤無窮矣」という文言を引用し²¹、

これを論拠として「先天の道義国」²²という表現で、諸外国より優れた国家として日本の正統性を主張した。智学によれば、世界の国々では或る民族や人種が集合し土着して、次第に部落の状態を創るに至り、それが定着してやがて国家になったものであるが、日本のみは異なり、先天の約束や理由といった必然性をもって存在しているため正統性が認められる国家であるとされる。ここでは「日本書紀」の建国神話を論拠に、「主権者が自ら主権者であることを認定した」という解釈によって日本の尊厳性を強調することで、国体の新たな論理化が行なわれているのである。さらに、日本の地理・気候・風致にそれぞれ特色を並べて、それらが優れた文化の発展条件となっていることも正統性の裏づけであると説明すると、神話において神武天皇が発したとされる「六合を兼ねて都を開き、八紘を掩いて宇と為す」という文言に新たな解釈を付した。その解釈とは、文言中の「六合」「八紘」が世界全体を意味しており、また「都を開く」とは政治が一つになること意味しているというもので、世界各国が政治において一つになり、世界の各民族を一つの宇とすることが即ち日本の建国スローガンであるという内容である。これが後に「八紘一字」と成句化されることになり、国体を表す用語として普及していく。

このように、日本の特異性と国体の正統性を挙げて、新たな国家目標を含んだ「八紘一字」の成句を掲げた智学は、その上でさらに国体と法華経を結びつける。智学の主張した「建国スローガン」と日蓮主義との結びつきとを簡潔にまとめれば、建国以前から世界を覆い一つの宇と為すべき理想をもって誕生した日本は、世界人類を一家とする使命を帯びる先天の道義国で、日蓮は日本がそのような成り立ちをした国家だからこそ自らとの関係性を強調したのであるから、日本の主義と日蓮の主義とは同一視してよいものだ、という内容になる。

智学の論拠は、「日本書紀」に求められるわけだが、それは智学の主張において元来の国家目標であった「八紘一字」が、法華経の説いている「実践重視主義」や「広宣流布」に共通すると言う論理に基づいている。そもそもの法華経は、釈迦が予見した仏教歴史観において最後に区分される「末法時代」に広められるべきとされた経典であったが、日蓮主義を創設した智学は法華経と国書とを結びつけ、それぞれの内容に合致する点があることを主張して、日蓮主義が国是となるべき議論をもたらした。ここで言われる「日本書紀」と法華経の一致とは、「日本書紀」における「八紘一字」が、法華経の「広宣流布」・「一天四海回帰妙法」と同じ意味をもつとする点で、具体的な言葉を当てはめれば「日本書紀」における「八紘」と法華経における「一天四海」とが合致し、そして「一字」と「回帰妙法」とが合致するということになる。

日蓮宗は法華最勝という立場から他の一切の宗教を否定している。法華最勝とは、法華経こそが末法の世の中を救済できる唯一の経典であるという立場をいう。また、日蓮の著

した意見書・「立正安国」に表れているのは「法国相関」という概念で、他の鎌倉仏教の説く彼岸的救済ではなく、現世での実践における此岸救済を説いている。日蓮主義ではそこから「未来記」という仏の予言を重視することで、日蓮宗の法国相関を新たに理論化し、それによって日蓮主義の立場から独自の国体論を構築するものであった。智学の「国体論」には法国相関の論理が全面に押し出されており、その中では皇室も日蓮仏教に裏付けされた「世界統一の天業」を推進する指導者的な立場にあるが故に尊いとされ、法華経と日本国とは互いに必要不可欠な関係にあるとされている。こうした智学の法国相関論は、海外への国権拡張を実行しつつあった1910年代を背景に発展していった。さらにこの法国相関論に基づいて、智学は「日本書紀」の中から自らが選んだ語彙を抽出し、その文句を神武天皇による建国の道義であるとして「建国三綱」と名称を付けた²³。そして、この「建国三綱」が日蓮の三大秘法（本尊・題目・戒壇）に呼応するものと説明する事で、国書と日蓮の教義を結びつけ、国柱会の布教を手段とする日本の世界統一を主張したのである。

右の論旨を骨子に、智学は1911（明治44）年から「日本国体学」を展開し始める²⁴。活発化するの、1920（大正9）年11月3日（明治節）に『日本国体の研究』を世に発表するについての『宣言』²⁵を行って以降で、これから後は「日本国体の研究」を国柱会発行の「天業民報」に連載した。連載された論文は、1922年に『日本国体の研究』という一著に集大成としてまとめられている。

このような智学の終末論的な世界統一志向を特に支えたのは、「観心本尊抄」「撰時抄」「三大秘法抄」という日蓮の3つの遺文であった。そのうちの「観心本尊抄」は、正しくは「如来滅後五五百歳始観心本尊抄」というもので、日蓮と弟子の問答形式の記述をとりながら仏教の歴史区分を基礎に法華経による救済を理論化している。日蓮は弟子に対して、末法の世においては「未来記」という予言書にある4体の菩薩（四菩薩）が此岸救済を目的として出現することが明らかであるということ強調した上で、日蓮以後の時代では法華経を広めることが正しいことを説いた。そして法華経を広めるにあたって、折伏（強硬な手段）をもって流布を行う時は菩薩が賢い王の姿で現れて愚かな王を誡め、摂受（懐柔）を行うべき時には僧侶の姿で流布すると予言する（日蓮は自身がこの僧の姿で現れる菩薩であると主張していた）。さらに遺文には、四菩薩が現れる「救済」の時にはその予兆として地震や彗星といった天変地異が起こることと、天変地異とともにかつて無かった程の大きな規模の大乱が現実世界一帯に起こることも記されている²⁶。日蓮主義は右の大乱を乗り越えた後に「広宣流布」を果たし、最終的には「一天四海回帰妙法」の世界統一を遂げることになっている。この田中智学の国体論は記紀によって日本の正統性を裏付けることで他国をその国の宗教と共に否定し、否定する論拠を日蓮の遺文に求めた国体論であると評価することができる。

5、日本における日蓮（法華）信仰と国内状況の関係

上述のように国体論によって特徴づけられる国柱会には、賢治も含めた文豪の他にも、思想家や軍人などの著名人も少なくなかった。彼らにとって国柱会を通じた信仰生活はどれほどに重要であったのだろうか。本節では、大正期に田中智学の国柱会が選ばれ、隆盛した理由を知るため、日蓮系の宗旨が歴史に与えてきた影響を考えながら、当時において国柱会が人気であった理由を考察する。

日本史上で、日蓮宗が隆盛を見せた時期は3期挙げられる。最初の時期は日蓮自身が活動した後の鎌倉時代。次には、室町末期から安土桃山時代における不受不施派や町衆が登場する時期。そして、国柱会が運動を展開していた大正から昭和初期にかけてである。この3つの時期は、海外との緊張関係が高まった時期として共通性がある。鎌倉時代には、モンゴルによる襲来の危機があり、日蓮がそれまでに主張していた国難到来が実証されたとして宣伝された。また、室町時代には天文法華の乱によって法華宗が活発化し、朝鮮出兵の頃までに、在家信者も含む日蓮宗系の活動が目立った。そして近代においては、智学らによって日露戦争を契機に第二次世界大戦まで隆盛したのである。こうした対外危機や外交関係での異変・緊張状態に直面した時に、盛り上がるのが法華信仰なのである。この傾向は法華経の持つどのような特性によってもたらされているのであろうか。

法華経には法華経典を保つものには究極の功德が与えられ、最終的な救いがもたらされる事が繰り返し述べられるが、同時に法華経を信仰する者は迫害され弾圧を受けることになるという極めて特異な予告が記されており、日蓮自身も深刻な迫害に遭う。そもそも排他的な法華最勝主義が他宗との衝突を招くことは必至の成り行きであるのだが、しかし、そうした圧力を受ける際には、体験した受難を法華経の予言どおりであると解釈することによって、今度はそれが法華経の正しさを裏付ける根拠となる。ここには、日蓮信者が「法難」と称される信仰上の矛盾や困難を体験することで、信仰心がそれまで以上に一段と強固なものになるという作用が内包されている。日蓮自体も、法然の浄土宗を奨励していた鎌倉幕府などから受けた弾圧を法華経に示されている予言の通りであると解釈し、信仰への確信を強めていった。国柱会も同様であるが、「予言」を非常に重視する法華経の信仰スタイルは、信者にとっては正当性を証明する根拠であり、他宗と自らの宗教を隔絶するアイデンティティーの確立でもあるのである。

このように予言の効果による「受難の転化」が信仰を強化することで、日蓮の宗教は「危機を希望へと転化する。それ故、危機感やフラストレーションが社会に充満していればいるほど、日蓮の教えは有効性を高める」のであり、「時代の不安を克服しようとするエネルギーは、日蓮の教説において普遍的価値を賦与される」²⁷ということになる。つまり、日

蓮の思想は危機的状況を論理化するところに特性を得るため、社会的憤懣の高まる時期にこそ評価を得るのである。実際に賢治の時代には、彼の出身地である東北においては特に、大戦景気以降の経済状況の悪化による不満と社会不安があった。では、日蓮教義はどのように社会的憤懣に対応して支持されていくのかということにも説明が必要であろう。これには、日蓮宗の信仰における指針が記されている遺文の「開目抄」から分析される。

「開目抄」の中では日蓮宗の信仰における基本姿勢が述べられているが、そこでは万民を正法に導く方法としての「摂受」と「折伏」（破折調伏）の2種が説明されている。そのうちの摂受とは相手の義を容認しながら争うことなく穏やかに導く教化法を言い、折伏とは相手を許さずに厳しい戒めを以って徹底的に論破することで教化することを言う。そして、日蓮は末法の現世で万民を正法に導く（広宣流布）為には、折伏行を執らなければならないと断言している。

智学は布教喧伝の際に、従来の日蓮宗よりも折伏行を重視しつつ、国柱会と対立する宗派と天皇に不忠な者とを同様に扱うことで、一般市民にとっても日蓮主義に敵対する者を打ち滅ぼす闘いが必要かつ正しい行いであるとした。そしてその戦い方として、他の信仰を「打ち折り説き伏せ」て、法華経の教えに導く折伏の必要性を説いたのである。

日蓮教義では、折伏と摂受は相手によって使い分けがなされるものであったが、但し、邪智謗法に対しては折伏にのみ効果を認め、末法の現世においては折伏が優先された。智学は自著「本化撰折論」のなかで、この使い分けの相手が人間に限らず、「謗国」と「悪国」とに分類することで国家にも「撰折」²⁸を適応させて考えることができると述べている。そして前者には摂受を、後者には折伏を行うことになるが、ここで指摘すべきことは、折伏という信仰上正当化されている一つの宣教スタイルが智学によって国家間の関係に読み替えられ、しかも「悪国」に指定された相手国であればそれを打ち滅ぼすことが「折伏正意の立教」²⁹という根拠を以って善行とされるという事である。

当時の対外拡張を契機として、皇室権威と自らの主張する日蓮主義を結び付けた智学の運動は様々な業種で多岐にわたって受け入れられ、多くの共鳴者を獲得した。1922年にはその黄金期を象徴するかのよう、日蓮に対して皇室から立正大師号が宣下された。この背景には、日蓮の終末論的な世界統一の予言に加えて、その予兆としての賢王の登場と天変地異とが宣伝されていたことが挙げられる。同時代にハレー彗星接近による天文ブームが起こったこと（『銀河鉄道の夜』もこの天文ブームを背景に成立している）や、後に摂政宮・裕仁として登場することになる皇太子が誕生していたことなどが日蓮の予言に信憑性を与えたのであった。しかし前述の日蓮教義の隆盛した3つの時期を通観すれば、国柱会を含めて、日蓮のもつ排他性にこそ隆盛の理由が見つけられるであろう。日蓮の信者は、折伏行を実践する義務を内心に秘めることになるため、それが単なるフラストレーション

の吐露であっても、徳性の備わった善行として肯定される性質を自然と帯びることになる。そのため現状否定を目標とする大衆運動の場合には、論理を持たない社会不安や憤懣の感情をも吸収することが可能となって、日蓮教義と結合することで単なる憤懣は一転し、論理化された強く攻撃性の高い運動として現れるのである。しかも運動が弾圧に遭った場合には、どのような理由による圧力かは問題視されずに「法難」として「予言」を裏付ける正当根拠に変化するるのである。

事実、賢治の置かれていた社会背景に目を向けると第一次大戦後に農業者の減少と労働者層の急増が起こっていたことに着目できる。右の情勢は、国柱会が最も支持を得た1920年頃までにはすでに大戦景気が過ぎ去って一転しており、急増した労働者の間に経済格差を生じて農業には深刻な経済不況が顕在化していた。この日蓮の「第3の隆盛期」もまた社会不安の時代だったのである。

賢治は国柱会での信仰生活を始めた頃、友人宛の書簡において「このごろ格別の理由もないのに怒りの感情にかられている」³⁰と訴えている。信仰を得た賢治は、まず内心に義務づいた折伏行を父親に対して行なった。結果は宗旨問答に敗れて家出することとなったが、そもそも排他性を強く備えた日蓮主義を選びとった背景には、不満の感情や社会変革の要求があったのではないだろうか。

6、日蓮主義による変革要求の転化

日蓮主義の実践主義的な価値観や、憤懣の表出としての信仰は、賢治以外の国柱会のメンバーにも覗えそうである。ここでは例として、賢治と同じ文学の世界で活動した高山樗牛と、日蓮教義を歴史的な文脈に位置づけて満州事変という形で実践した石原莞爾を取り上げてみたい。

高山樗牛の小説『瀧口入道』は、主人公の武士が恋愛に苦悩した結果に出家して入道となったが、かつての主と出会って旧主家の衰退を知り、さらにその主の死に触れると入道も運命を共にして割腹するという作品である。平家物語をモデルとしながらも、その構想を大幅に脱したこの歴史小説の中で著者・高山樗牛は、主人公を宗教的解脱と封建的倫理の矛盾に直面させている。そして、入道に割腹という武士道精神の表わされた作法を通じて、あえて封建的倫理観を選択させているわけである。ここから、日蓮主義を踏まえつつ樗牛の価値観を推し量れば、つまり教義そのものの尊さよりも実践を重んじるのであり、何事も実践されることがなければ価値を認めない「宗教性よりも価値の高い実践」という考えが垣間見られよう。

また、陸軍の中堅将校として満州事変を画策・実行することになる石原莞爾には智学的主張で言うところの「悪国への折伏」が確認できる。彼は独自の戦史研究から、戦争は社

会科学上の変化と技術革新に影響を受け進化を遂げるが、その戦争の進化には法則性が秘められており、進化のパターンを把握することで将来の戦争像を予測し得るとの持論を立てていた。その上で日蓮主義の「予言」を得た石原は、持論において戦争の進化が極限に達する時代と、四菩薩救済の予兆として起こる「大乱」の時代とが合致することを述べ、持論の戦史研究を「最終戦争論」へと昇華した。この戦争史と日蓮主義史観とが合一した「最終戦争論」によって、アジア・太平洋戦争の幕開けとなる満州事変が引き起こされるのは周知の通りである。

その後の石原には、満州事変の前後で変節のあったことや、勝利できるはずであった対米戦争に敗れると最終戦争論を自ら否定することなどに、いくつかの疑問が残るが、戦後にも日本の復興に関して「新日本の建設」と称する構想を記している。

石原によれば、戦後復興にとっての急務は当時の人口七千万人を養うだけの食糧問題の解決であった。石原は食糧不足に苦しむ原因が、都市部が安価に食糧を入手するのに対し、農村では食糧増産が価格の下落をもたらすために増産に対する意欲を失することにあると考えた。この問題の解決は、国民の簡素化生活を前提とする都市解体と、都市解体による国民皆農に求められるのだが、石原は各都市が空襲を受けたことを都市解体の好機と捉え、

「自給自足の原始生活は文明の進歩と共に分業より分業へと進歩したが、歴史は再転して総合的経営の方向をとり、農工の対立は急転して農工一体、国民皆農へと進む

〔中略〕都市生活による生物学的滅亡の危機から救われ、八紘一宇実現後の最高文明に向かって大道を邁進するのである。」³¹

と述べている。

以上に見たように、日蓮主義は社会変革の要求をもつ人物や、変革の実践を望む人物に好まれる傾向が挙げられる。それは日蓮主義が教義とする「此岸救済」が、理想社会の実現を目指す運動に正当性を与えることが期待されたためであろう。そしてこの観点から賢治を分析した時、学友である保阪嘉内（同人誌に発表した文章の禍筆で学校から退校処分を受けていた）に宛てた賢治の手紙に着目できる。

「私共が新文明を建設し得る時は遠くないでせうがそれ迄は静に深く常に勉め絶えず心を修して大きな基礎を作つて置こうではありませんか。あゝこの無主義な無秩序な世界の欠点を高く叫んだら今度あなたの様に誤解され悪まれるばかりで、堅く自分の誤った哲学の様なものに噛り着いて居る人達は本当の道には来ません〔中略〕どうか私共だけでも、暫らくの間は静かに深く無上の法を得る為に一緒に旅をして行かうではありませんか。〔中略〕誤れる哲学や御都合主義の道徳を何の苦もなく破つていかうではありませんか・・・」³²

右の文面からも賢治の現状に対する憤懣は容易に見てとれようが、世間一般のモラルを

「御都合主義の道德」と非難し、「無主義」な世間を非難する賢治には、現状否定の考えと「新文明を建設」する実践の精神が排他性を伴って現れている。次節で触れるが、賢治にも「農村改良運動」という自身による経済計画があり、それは石原の「簡素生活」や「国民皆農」のヴィジョンと共通するものがある。出身地域と信仰を同じくする両者の主張は、議論の時期は擦れ違うものの、農業に着目しつつ変革を成そうとする「新文明」の建設を目指す点では一致しており、当時は「新文明」を望むだけの社会矛盾が出現していたことが理解できる。賢治が豪商の家に生まれながらも農民に尊敬と憧れを抱いていたことはよく知られるが、荒廃の顕著であった東北の農村の実情を知る両者が、変革の欲求を堆積させていた事実と、日蓮主義を選びとった事実とは無関係ではなさそうである。

7、日蓮主義の転用 - 社会主義へむかって -

賢治が国柱会の正会員たる信行員になった頃、ロシアでは戦争状態を脱する平和運動と階級闘争が連結して十月革命が起こっていた。ヨーロッパ諸国とアジア諸国の中間に「共産主義インターナショナル」の指導する国家が登場したことは、政治学上・地政学上双方における重要性をともなうて、帝国主義国家として戦争を遂行してきた西ヨーロッパと、被抑圧者として労働農民運動を顕在化させたアジア諸地域のそれぞれにマルキシズムとナショナリズムによる多極化された構造を生み出した。

右の動向を背景としながら、国柱会による日蓮主義信仰を有しながらも、賢治は次第に左翼思想に関心を寄せるようになっていた。1921年の暮以来、花巻農学校で教師をしていたが、1925年の春になると賢治は「来春はわたくしも教師をやめて本統の百姓になって働きます」³³と考えるようになった。賢治は、後に農民芸術の普及を理想とし「農村改良運動」を計画することになるが、現金収入の少ない農村では単に生産増加を測るだけでなく、物々交換による経済改善を奨励するのが良いと考えていたようである³⁴。また実際に、自身でも花巻農学校に設置された岩手国民高等学校で講師として「農民芸術」を講義したり、労働農民党稗貫支部が発足すると事務所を紹介した上に、謄写版を提供したり、資金援助まで行なうなど陰からの積極的な協力をしている。

労働農民党は1925年3月に創立された合法左派無産政党であったが、前年の12月に結成された農民労働党が共産主義と繋がっているとの嫌疑で即日禁止されたために、当初は左派を排除した形で結党された。委員長には日本農民組合委員長だった杉山元治郎が就任する。労働農民党は、結党後に地方支部が組織されていく過程で左派が流入し、親共産主義の立場を取る左派の地方党员と反共産主義の立場を取る右派の幹部が対立する。26年12月には右派が脱党して社会民衆党を結成し、中間派が日本労働党を結成したことから、労働農民党は左派が主導権を握ることになった。後に戦時期になると中間派であっ

たはずの日本労農党には、社会主義の実現を国家主義に求めて右傾化し軍部に積極的に協力した議員が多く登場するようになる。

本稿が先に引用した東京に上京（1914年）した時点での賢治の手紙には既に、出版所の主人のような「利害打算の帝国主義者」を悪とする認識が見られたが、そもそも反体制を潔しとする感情と、反動姿勢を形成するだけの現状否定の欲求があったと言えるわけである。当時の農村では急速な工業化の影響から都市への出稼ぎ労働が増加して荒廃を加速させたが、東北部の農村では封建時代における人間関係の継続と、強固な寄生地主制度が残存していたため、変革要求は鬱積しやすかった。その中で、賢治は決して表に姿を出さずに労働農民党を支持していたのである。

これまで賢治について特定の政治思想があったという評価は特に下されていない。実際に特定することは困難であるが、しかし、体制に対峙する現状否定の欲求から排他性の強い日蓮主義を選び、社会主義運動が高揚し始めてからは社会主義・共産主義思想に惹かれていったことは確認できるのである。そして日蓮主義とマルキシズムとがともに掬い上げるのは現状変革の要求であろう。因みに、賢治が自費で出版した詩集で、その「序」において創作に「二ヶ月間の過去」を費やしたと述べられる「春と修羅」が世に出た1924年4月から、2ヶ月間を遡った1922年7月の15日に、ロシア革命の影響を受け、日本共産党が結成されている。

8、宮沢賢治の思想の変遷

大衆意識が強調される都市騒擾において、ナショナリズムが隆起し、無産政党の一部にもやがて右傾化する党が登場する。そして、国柱会の日蓮主義内部でも国家主義との連結が起こっていた。

日蓮宗教史の上で田中智学を評価すれば、一つには智学が日本書紀から国体の正統性を導きだしたことで、法華思想と近代日本が結び付けられたことによる意味づけができるが、そもそも智学には、日蓮主義を国家宗教としたい考えが明確にあった。日露戦争の頃から、ナショナリズムの昂揚が顕在化され、日本仏教界全体が国家主義と結び付いていく中で、国柱会はそれを先駆けて主体的役割を担っていた。そのため国柱会のメンバーには、北一輝や井上日召といった過激な右翼主義者も含まれることになる。

国柱会は日蓮主義による戒壇建立を実現する為に、国家規模での日蓮主義運動の展開を必要としたのであり、そしてその実現を果たすにはナショナリズムとの結合は必須であった。この意味において智学には当初から天皇の存在と日蓮の教義を結び付ける必要があったのである。しかし、そもそも日蓮の教義は社会的・政治的配慮を顧みず信念のもとに直接行動を起こすというものである。迫害と殉教こそが法華信者の証明であると言って過言ではない。時の権力を

一切に認めず、法華の教えを唯一の正義とするのが法華経の内容である。だからこそ迫害にも遭うのである。しかし智学は戒壇設立の必要性から天皇の尊厳性を利用した。智学の国体論は、宗教団体を拡大させる宣伝方法としては実に成功をおさめたであろう。だが記紀神話と日蓮の間に、無理に関係をもたせても根拠や理由が発生してくるわけではない。何故なら、そもそもの日蓮の姿勢は、法華経以上のどんな根拠や理由にも頼ることを必要としないものだからである。

また、釈迦の予言の中に近代日本の天皇を位置づけることにも矛盾がある。智学の「摂折」論や「法国相関論」・「建国三綱」といった考え方は、近代の国際環境を背景に日蓮の遺文を遡り、日蓮主義拡大に必要な根拠を探し出してのものである。ここでは釈迦の教えや、日蓮の遺文の成立時の概念や世界観・時代背景は検討されずに、近代の概念による智学の解釈に当てはめて根拠を摘み出す、時間の顛倒した論理が展開される。

しかし、このために国柱会は国体の拡大解釈によって軍部とも協調可能となり、国家間闘争の論理化も成し得て「第3の隆盛期」の創出に大きな役割を果たした。結果的には、これらの運動が「抑圧の近代」を日蓮教義が乗り切る方途だったと評価できる。

さて、信仰の母体がナショナリズムとの結合を強めていく過程で、マルキシズムに関心を寄せシンパとして援助していた賢治は、自身の選択についてどのように考えていたであろうか。当時の賢治の決断を示す証言が社会主義活動を行っていた川村尚三という人物によって残されている。

「賢治と私とは人々の交際とはちがい、社会主義や労農党のことからであった。〔中略〕その頃、レーニンの『国家と革命』を教えてくれ、と言われ私なりに一時間ぐらい話をすれば、「今度は俺がやる」と、交換に土壌学を賢治から教わったものだった。〔中略〕夏から秋にかけて読んでひとくぎりしたある夜おそく「どうもありがとう、ところで講義してもらったが、これはダメですね。日本に限ってこの思想による革命は起こらない」と断定的に言い、「仏教にかえる」と翌夜からうちわ太鼓で町をまわった。」³⁵

もともと賢治の左翼支援の活動は、表立ったものでなく影から行われたものだったが、高揚するナショナリズムを背景に賢治も結局のところは社会主義運動を諦めた。川村の証言にある「ダメですね。日本に限って…」が示しているのは、天皇制に抵触する活動が弾圧を受けるか、または合法であってもやがて右傾化してしまうかといった当時までの政党史を背景にしているであろう。しかし、右の証言は同時に「この思想による革命は起こらない」と、革命成功の見通しさえ立てられれば共産主義革命の実践を望んだであろうことも暗示している。信仰や革命思想を求め続けていた賢治には、強い現状変革の要求が若い時期よりあった。賢治のみならず高山樗牛などにも共通するが、新興宗教であった国柱会の信者は家系等の伝来によらず、日蓮主義という信仰を自身の考察の結果に選びとっている。彼らにとって実践を強調する日蓮主義は、行動原理を求めた結果としての選択と位置付ら

れそうである。

おわりに - 「石炭袋」の示すもの -

宮沢賢治の遺作『銀河鉄道の夜』から作品の背景となった賢治の思想について分析を試みた。その結果に、当時隆盛を見せた日蓮主義による強い影響と、マルキシズムへの関心との間で揺れ動く賢治の姿が明らかとなった。政治思想家や活動家だったわけではない賢治の背景にあった宗教思想や政治思想を探る試みはナンセンスであるという批判を受けるかもしれないが、しかし、イーハートブ文学の作家・宮沢賢治は自身の作品に示そうとした理想郷のイメージをどこから得たのかという問題は関心となり得るのではないだろうか。賢治にとっての「理想郷」を考察しつつ、再び作品の中に目を向けると、まず新大陸が登場していたことに切り口を見つけられる。

本稿の冒頭で、賢治の一般的なイメージにおいてキリスト者であると錯覚されるのは、『銀河鉄道の夜』にも頻繁に現れたキリスト教色が原因であろうことを述べたが、そもそも賢治は、なぜ作品中にあんなにもキリスト教色をもたせたのであろうか。その解答は、日蓮主義の特性を踏まえた上で、本稿が指摘した「二つの天上」とジョバンニと大学士による「ほんとうの神さま」問答を見れば解る。

まず、賢治は明確にキリスト教を否定している。南十字による最初の「天上」を登場させた後に、カムパネルラに石炭袋を「ほんとうの天上」と語らせたのは、南十字が真の天上たり得ないという考えに他ならない。それから、ジョバンニ（賢治）の言う「神」は、大学士が真理であると堅く信じて選択する神ではなく、世界の諸宗教を超越し頂点に到達し得る神であるが、「そんなんでなしに、たったひとりのほんとうの神さま」には各宗教を乗り越えなければ真理が得られないという考えが現れていよう。それは、カムパネルラを失って泣いていたジョバンニに語りかける「やさしいセロのような声」の述べた

「みんながめいめいじぶんの神さまがほんとうの神さまだというだろう。」

からも読み取れる。

個々人が、思い思いの神（正義）に従って正当性を主張し合っているだけでは、天上に到達できないからである。そして、法華文学の創作を開始した時点では、日蓮主義には世界の宗教を超克する可能性が見込まれた。日蓮主義役割は「一天四海回帰妙法」という世界統一を成し得たはずであった。大学士らには彼らにとっての天上があり、カムパネルラにも彼の天上があった。そしてジョバンニには此岸で到達すべき天上があったのである。しかし、賢治は「天の川のなかでたった一つのほんとうのその切符」を現世を生きるジョバンニにだけ持たせた。

賢治が不満としていた道徳の退廃した社会から離れて、信仰と労働の一致した理想社会を実現するためには、各国の宗教を超越し得る理論が必要であったのであり、革命運動によって誕生した「新大陸」や、農奴制を克服したマルキシズムに関心を寄せたのも現状変革の要求があ

ったためであろう。天皇制に抵触することなく日本に変革をもたらす可能性を賢治が最大に見込んだもの、それは国体論によって賢治の現状否定の憤懣を救いあげた日蓮主義信仰であった。しかし、最終的な欲求を国柱会が解消しなかったことも『銀河鉄道の夜』によって確認される。賢治が「法華経こそが末法救済の唯一の経典であることを信じて疑わなかった」³⁶とする評価があるが、作品の手直しを幾度も重ねた結果に、釈迦や菩薩の待つ極楽が「天上」として描かれなかったことは、法華経にも最終的な救いが得られなかったことの顕れとも考えられるのではないか。

本稿の検証過程で示されたのは、『銀河鉄道の夜』が、現状否定の欲求を抱えながらも揺れ動く社会状況の中で、その都度考察・改稿が施された作品であったということである。従って、賢治の後半生で変遷した思想の跡が表されている本作の検証は、作者の思想的変遷のみでなく大正時代の政治思想史における一潮流をも示しえるのである。『銀河鉄道の夜』は、原稿の状態と構成の問題から未完成作品と言われているが、それは悩み続けて未だ解答が得られない賢治の思想からも未完成であると言わざるを得ない。しかし、だからこそ賢治の残した問題に「誠実な態度」で向き合うことに文学作品『銀河鉄道の夜』の意義があると考ええる。

完

* 本稿は筆者の修士論文の一部を基礎に執筆した拙稿〔「大正期の思想潮流についての一考察—思想運動としての『銀河鉄道の夜』—」『駿台史学』131号。2007〕を加筆・修正したものである。

【英文要旨】

Ideological movement in “The Night of Milky Way Train” - analysis of the ideological trends in Taisyou period -

ISE Hiroshi

【 Key words 】

two heavens・the Activism・social unrest・desire of social change

【 Substance 】

This theory is about the analysis of social background and the thought of the ideal trend, through the works of Kenji Miyazawa written in Taisyou period. Kenji worshiped NICHIRENISM which influenced in his works. Especially “The Night of The Milky Way Train” shows the changes of ideological movement in Taisyou period by NICHIRENISM demonstrated by himself. Having studied the thought of Kenji from the character’s a word

and deed, this theory points out the social meaning of NICHIRENISM.

This analysis of “The Night of The Milky Way Train” shows that “two heavens” in the story was delivered by NICHIRENISM. The period including Taisyuu when Nichiren sect of Buddhism was popular politically was the time of social unrest in Japanese history. In my opinion, Nichiren sect’s the Activism is likely supported as a method of exploding anger. NICHIRENISM which has a strong exclusive doctrine, agitates the movement of social changes. The theory also assured Kenji’s growing concern for Left-wing ideal and the social changes.

As the conclusion of the theory, it was NICHIRENISM that Kenji finally reached after, denying and feeling anger about the condition of his homeland and longing for the changes. The analysis shows Kenji’s unstable emotions between NICHIRENISM and the concern for Marxism.

“The Night of The Milky Way Train” indicates not Kenji’s desire of social changes and hesitation, but one of the ideological trends in Taisyuu period.

註

- 1 『宮沢賢治全集』、第十巻。(ちくま文庫、1995年)、22頁。
- 2 宮沢賢治『校本宮澤賢治全集』宮沢清六編(筑摩書房、1973年)。
- 3 入沢康夫・天沢退二郎『「銀河鉄道の夜」とは何か：討議』(青土社、1876年)。
- 4 西田良子氏によれば、賢治が1923年に行った樺太旅行の体験をもとに執筆した「青森挽歌」と『銀河鉄道の夜』のモチーフが類似していることや、関東大震災の際に書かれた手紙の裏が「第一次稿」になっていること等から、「構想は大正一三年夏、着手はその秋以降」がほぼ通説となっている、と説明される。〔西田、『宮沢賢治「銀河鉄道の夜」を読む』(創元社、2003年)、207頁。〕
- 5 岡屋昭雄『宮澤賢治論 - 賢治作品をどう読むか - 』(桜楓社、1995年)、81頁参照。
- 6 『国柱会百年史』(国柱会、1984年)、267頁参照。
- 7 小田邦雄『宮澤賢治 作品と生涯』(新文化社、1950年)、69頁参照。
- 8 小田、同前、91-93頁参照。
- 9 小田、同前、93頁。
- 10 小田、同前、97頁。
- 11 村瀬学『「銀河鉄道の夜」とは何か』(大和書房、1989年)。
- 12 宮沢、『銀河鉄道の夜』谷川徹三編(岩波書店、1951年)、273頁。
- 13 宮沢、同前、293頁。
- 14 一行がトウモロコシ畑に入ると「新世界交響楽」が流れる。同曲はドボルザークが新大陸をイメージして作曲したもの。
- 15 山根知子『宮沢賢治 妹トシの拓いた道』(朝文社、2003年)、238頁参照。
- 16 分銅惇作編『近代文学論の現在』(蒼丘書林、1998年)、213頁。
- 17 田中智学『日蓮主義新講座・概論』(獅子王文庫、1934年)、13頁。

-
- 18 宮沢、前掲、271 頁。
- 19 山根、前掲、287 頁参照。
- 20 宮沢、前掲『銀河鉄道の夜』、295 頁。
- 21 「葦原の千五百秋の瑞穂の国は、是れ吾が子孫の王たる可き地なり。宜く爾皇孫就て治らすべし。行けや。宝祚の隆えまさんこと、當に天壤と窮り無かるべし。」『日本書紀(上)』宇治谷猛訳(講談社学術文庫、1988 年)、59 頁参照。右の日本書紀の記述内容が、〔田中、「本朝沙門日蓮」『日本精神講座』、第四卷。(新潮社、1934 年)、181 頁。〕に引用されている。
- 22 田中、同前。
- 23 田中は日本書紀から「積慶」・「重暉」・「養正」の三語を抽出し、建国三綱とした。〔田中、同前、184-185 頁。〕
- 24 『国柱会百年史』(国柱会、1984 年)。
- 25 田中、前掲「本朝沙門日蓮」、217 頁。「日本国体を発表するについて」として宣言文が載せられており、その中で国体は世界の道として紹介されている。文中には既に「八紘一字」の語句が使用され、宣言文の始めと終わりは「世界を挙げて日本国体を研究せよ。」となっている。
- 26 日蓮が予言した国難到来(文永・弘安の役)の際にも鎌倉に頻繁に大地震等の天変地異(1250 年代後半の建長 8~正嘉元年)があり、それが予兆であったとされた。
- 27 五百旗頭真「石原莞爾における日蓮宗教」『政経論叢』、第一九卷。(広島大学政経学会、1969 年)、140 頁。
- 28 「摂折」は摂受・折伏の意。〔田中智学「本化摂折論」『明治宗教文学集』福田行誠編(筑摩書房、1969 年)、182 頁参照。〕
- 29 田中、同前、192-199 頁。
- 30 分銅、前掲、206 頁。
- 31 石原莞爾『人類後史への出発』石原莞爾平和思想研究会編(展転社、1996 年)、26 - 27 頁。
- 32 分銅、前掲、197 頁。／岡谷、前掲、119 頁。
- 33 「大正一四年四月一三日、杉山芳松宛書簡」。宮沢、『新校本宮沢賢治全集。第一六卷下』(筑摩書房、2001 年)参照。
- 34 西田、前掲、219 頁参照。
- 35 「大正一五年 川村尚三談」。前掲『新校本宮沢賢治全集。第一六卷下』、参照。
- 36 分銅、前掲、231 頁。